

厚木・伊勢原・秦野の古墳調査（１）

－近年の調査事例と周辺の古墳について－

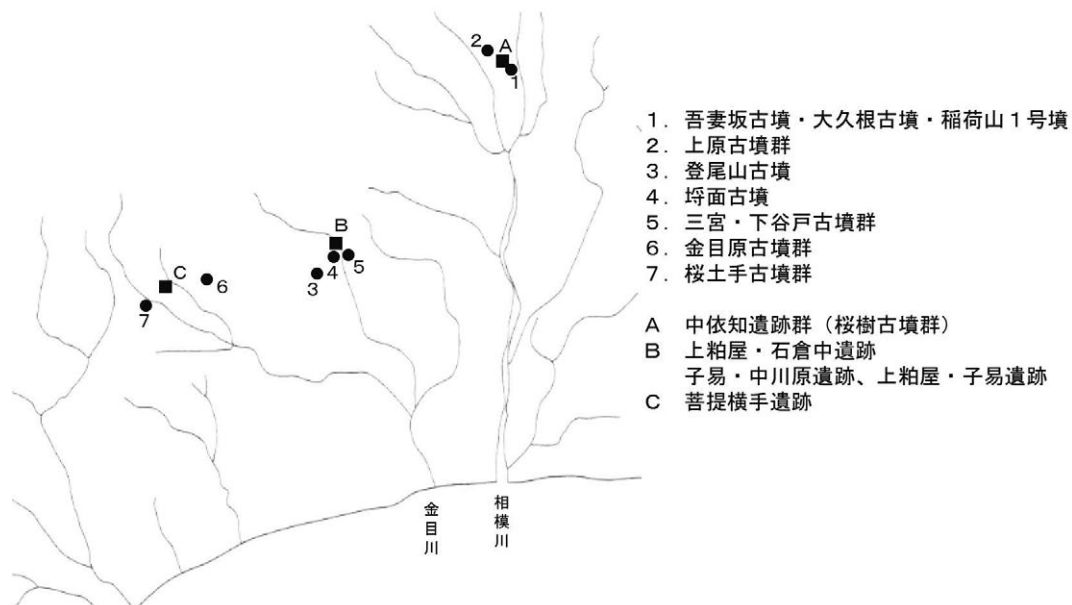
古墳時代研究プロジェクトチーム

厚木・伊勢原・秦野市域では、以前から主に古墳時代後期の群集墳を中心に多くの古墳の調査が行われてきた。近年、新東名高速道路、一般国道246号（厚木秦野道路）建設に伴い、本財団が実施した発掘調査などによって、古墳、横穴墓の調査例が増加している。調査された古墳の中には、特徴的な墳形・構造を持つ子易・中川原遺跡1号墳のように、注目を集めた古墳も存在する。そこで、厚木・伊勢原・秦野の3地域で、新たに調査された古墳、横穴墓の周辺の様相について概観し、その関係性などを探る初端としたい。今回は厚木市域及び伊勢原市域について触れることとする。なお、新たに調査された古墳・横穴墓の名称・号数などは現段階で公表されている資料に基づく。

（１）厚木市域相模川西岸の古墳

1. 依知の古墳について

厚木市域では、相模川西岸の広い範囲に古墳群が展開していることが知られている。相模川西岸を並走する国道129号線から西側の中津川方面に所在する道満・上野原古墳群、それより東側に所在する下依知・金田古墳群、下依知・金田古墳群の北側に所在する桜樹古墳群、その北側に中依知地区西側から関口地区に展開する中依知古墳群、その北方の関口長坂地区に所在する長坂古墳群など計150基を越える古墳が造られたと推定され、その殆どが横穴式石室を有する古墳時代後期の円墳である（厚木市教育委員会・文化財協会1998）。その中で、下依知地区に所在する大久根古墳は、一辺18～19mの方墳で、4世紀後半から5世紀の



第1図 本財団の近年の古墳調査実施遺跡と周辺の古墳



第2図 中依知遺跡群1～3次調査の古墳と横穴墓位置図

所産と考えられている。同じく下依知地区に所在する吾妻坂古墳は径約55mの円墳で、5世紀前半の築造とされている。その北側に位置する稲荷山1号墳も5世紀代の40m級の円墳とされる。このように4世紀～5世紀代の古墳は下依知地区に集中している。その後、古墳時代後期の横穴式石室が導入された時期以降に、上記の各地区に群集墳が造られるようになる。

2. 厚木市中依知地区周辺の後期古墳

下依知地区の一連の古墳時代中期古墳の北隣に位置する中依知地区では、本財団が中依知遺跡群の1次調査として、円墳8基の調査を行っている。調査した古墳群は国道129号線の東側の一段低い段丘上で南北に展開する桜樹古墳群の一部である。また、古墳群西側の段丘斜面では1・2次の調査で4基の横穴墓（中林横穴墓群）の発掘を行っている。8基の古墳は、石室全体の調査を実施したものが5基、石室の一部を調査したものが1基、周溝の一部を調査したものが2基で、石室の一部、周溝の一部を調査したものはいずれも主体部は調査外に位置する。墳丘規模の判るものはいずれも径14～16mほどの円墳で、石室全体を調査した5基（1次1～5号墳）は、相模川に向けた東側・東南側が開口しているが、石室の一部を調査した1基（1次7号墳）は南西に向けて開口している。石室はいずれも無袖式で、玄室部および羨道部は地山面の一部を掘り込んで構築されており、側壁は河原石の小口を玄室内に向けて積み上げている。奥壁は樽状の大形の河原石を2～5段積んで構築している。玄室床面は拳大の円礫を敷き並べた上に、それより小振りの礫を敷き詰めて礫床面としている。1次1～4号墳は玄室の入口に框石を置き、床面を区分している。1次5号墳は玄室が羨道部より低くなる段構造の横穴式石室である。1次1～5号墳からは、直刀、刀子、鉄鏃、玉類などが出土しており、直刀は長さ60cm以下のものが多い。また、1次3号墳からは、鉸具、

菱形飾金具などの馬具も出土している。被葬者については、１次１号墳は人骨が出土せず、１次２号墳も遺存状態が悪かったが、残存していた歯は６歳前後の小児のものであった。１次３号墳では、壮年１体の骨が確認されている。１次４号墳は骨片のみの出土であった。１次５号墳では、６歳前後の小児と壮年の２体が出土している。古墳の時期は、出土遺物から６世紀末から７世紀前半の範囲と考えられる。

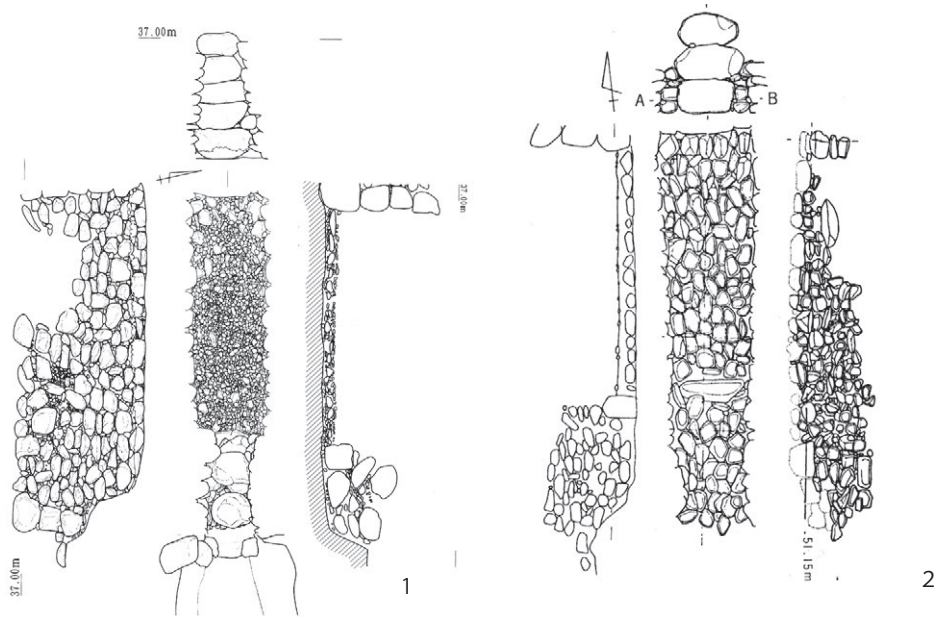
台地上から東へ向けて下る段丘斜面では、前述のように４基の横穴墓の調査が行われている。横穴墓は傾斜するローム面を横方向に掘り込んで構築されており、玄室の全容が判明している１次２～４号墓の玄室形状は撥形を、奥壁はアーチ状を呈している。また、開口部の前面はローム面を下に掘り込んだ前庭部（墓前域）が存在し、羨門部は河原石の長軸を横穴の主軸方向に向けて積んで閉塞されていた。玄室には小礫を敷き詰めて礫床を構築している。規模は１次４号墓が最も大きく、奥壁から羨門までの全長は５.８ｍである。続いて１次３号墓が全長４.５ｍ、１次２号墓が全長３.１ｍを測る。４号墓礫床では成人男性・成人女性・未成年２体の計４体の人骨が、１次３号墓からは幼児～小児３体の歯が検出された。１次２号墓からは検出されていない。また、その他の遺物はいずれの横穴墓からも発見されていないが、１次３号墓の前庭部の閉塞部手前から、７世紀中～後半の須恵器長頸壺と土師器坏が出土している。また、１次４号墓の前庭部の掘込みの堆積土中からは７世紀後半～８世紀初頭の須恵器長頸壺が出土しており、築造・埋葬時期は７世紀後半以降と推定される。なお、１次調査では、台地上に所在する国道１２９号線の東側まで調査を実施したが、台地上では古墳および古墳時代の遺構は発見されていない。

第３次調査では、国道１２９号線の西側の調査を行っており、現在までに２基の古墳の調査が行われている。１基は全体の調査が行われ、横穴式石室を持つ円墳であることが判明している（３次３号墳）。１基は羨道から玄室の一部と周溝の一部の調査を実施しており、円墳であったと推定される（３次１号墳）。古墳は台地の西端近くに所在し、西側に中津川を臨む立地となっているが、２基の古墳は南～南東に向けて開口している。石室はいずれも地山面の一部を掘り込んで構築されている。側壁は河原石の小口積みで、全体が調査された３次３号墳は、横穴式石室の一部が大きく攪乱を受けているが石室形態は無袖式で、玄室内から直刀・鉄鏃・玉類・骨などが出土し、前庭部、周溝からは須恵器・土師器などが出土している。

また、古墳の西側は中津川方向に降る傾斜面となっており、この傾斜面では現段階で計１０基の横穴墓の調査が行われている。発見された横穴墓はいずれも南西側に向けて開口している。現在までの調査で、斜面を縦に掘り込んだ前庭部を持つもの（３次１号墓）、撥形で礫床が施されるもの（３次２号墓）、前庭部の側壁部に河原石を積み上げあげるもの（３次３号墓）などが確認されている。

国道１２９号線西側の台地及び傾斜面に古墳、横穴墓が所在することは従前から知られており、中依知遺跡群３次調査の北隣では、天神１号墳と天神横穴墓群の調査が行われている。また、これよりやや北には上原１・２号墳、中原古墳（上原３号墳）などが所在する。

上原１号墳は推定径２０ｍの円墳で、無袖式の横穴式石室を持つ。石室は南東向きに開口しており、全長は６.３ｍ、玄室長は５.０ｍである。石室前面と羨道と玄室の境界、及び玄室内の床面の３個所に横長の仕切石が置かれ、拳大の礫を並べた基底面の上に小礫を敷き詰めた礫床面があったと推定される。玄室からは直刀、刀子、鉄鏃、耳環、玉類や人骨が出土している。人骨の詳細な分析報告されていないが、玄室内の仕切石を挟んで奥側・手前側の両方から前記の遺物とともに出土していることから、複数の埋葬が行われてると推定される。また、石室入り口部から須恵器坏、土師器坏が出土している。



第3図 厚木市域の横穴式石室 1. 中依知1次5号墳 2. 上原1号墳

上原2号墳は部分的な調査が行われている。調査された範囲の形状から、無袖式の横穴式石室と推定される。石室は南東を向きに開口し、玄室床面は拳大の礫を並べた基底面の上に小礫を敷いた礫床で、玄室入口はやや横長の石を2石横位に並べて仕切りとしている。羨道側の床面は玄室内より大きい長さ20～30cm超の石を並べている。玄室内から刀子、鉄鏃、耳環、玉類などと骨粉が出土している。

中原1号墳（上原3号墳）は推定径16mの円墳で、横穴式石室は南東を向きに開口し、地山を掘り込んで構築されている。石室の規模は全長6.0m、玄室長4.4mで、玄室と羨道の境界に横長の仕切り石を置いている。玄室床面は20～30cmの河原石の基底部上に小円礫を敷いて礫床を構築している。玄室から直刀、刀子、矛、耳環、玉類などが出土している。

3. まとめ

厚木市の相模川流域西岸から中津川にかけての河岸段丘や台地上は、県内でも有数の古墳の密集地帯である。古墳時代中期の古墳が下依知地区に造られるようになり、その後後期の群集墳が形成される。古墳時代後期の古墳は県内の他地域では石室を持たない円墳が存在し、一部では横穴式石室を有する古墳とともに群集墳を形成している例も確認されている。石室を持たない後期古墳の多くは主体部は竪穴系であったと思われる。横穴式石室の古墳に先行して築造されたと推定されるが、本地域では同時期に当たると考えられる古墳例は知られていない。古墳は横穴式石室の導入とともに爆発的に増加する。横穴式石室は無袖式を基調とし、地山面を掘り込んで構築され、奥壁や礫床などの構造にも一定の共通性を持ち、直刀などの副葬品も豊富である。一方、玄室の仕切りや玄室と羨道部段構造、羨道部や前庭部も床面、掘込み等にはバリエーションが認められ、新たな古墳の調査によってより詳細な検討が可能になると思われる。

本地域の横穴墓の調査・報告例は古墳に比べて多くないが、無前壁の撥形平面形を基調としており、掘込みによる前庭部が構築される。従来の調査例では、副葬品は古墳に比べて乏しい。中依知遺跡群3次調査では、前庭部側壁に石積みが施されている例も発見されており、従来未解明であつことが明らかになりつつあると言えよう。

(植 山)

（２）伊勢原市域の古墳

１．伊勢原市域の古墳について

近年新東名高速道路建設における発掘調査において、多くの後期古墳が調査されている。伊勢原市北部の丹沢山麓一帯、特に上粕屋扇状地から三ノ宮地区にかけては高塚古墳や横穴墓などが集中しており、その密集度は県内随一と言える（第４図）。

東名高速道路建設に伴う発掘調査でも、多くの古墳が調査されている。三ノ宮・下谷戸遺跡（矢戸他2000）や坪ノ内・貝ヶ窪遺跡（木村・柏木1999）などでは、弥生時代からの伝統を引く古墳時代前期の方形周溝墓が見つかった。鈴川に面する三ノ宮・下谷戸遺跡では、方形周溝墓が12基発見されており、周溝墓から出土する古い段階の土器を見ると、当地域の特色である東遠江系の土器の様相を残している。前期の集落と方形周溝墓がセットで見つかったが、住居域と墓域が明確に分かれて見つかり、住居域と墓域を分離する意識が芽生えていることがうかがえる。その一方で、上粕屋・三本松遺跡（矢戸・宮坂1998）からは、弥生時代末から古墳時代前期までの竪穴住居7軒と掘立柱建物1軒、方形周溝墓1基が発見されており、かなりコンパクトな集落も成立している。厚木市との市境に位置する御屋敷添遺跡（西川・天野1998）からは、中期古墳1基が発見されている。古墳の墳形は方墳で、一辺28m前後を測る。集落には前期から中期の連続性が見られず、前期の集落の断絶後、再び中期に集落と方墳が築造されたと見られる。本稿では、新規に発見された高塚墳を中心に伊勢原市内の後期古墳（高塚墳）について概観していく。

２．後期古墳について

三ノ宮地区には多くの後期古墳が築造されている（第５図）。

三ノ宮・下谷戸遺跡（矢戸他2000）からは、6世紀前半の横穴式石室と7世紀後半の小石室群が発見されており、古墳7基と小石室7基が発見されている（第6・7図）。古墳はいずれも円墳で、埋葬施設は横穴式石室1基、木棺直葬3基が確認されている。唯一埋葬施設が調査された横穴式石室を有する7号墳は、6世紀前半の構築と考えられている。木棺直葬の古墳と並行して横穴式石室が造られており、6世紀末以降になると、横穴式石室を持つ古墳のみ造られている。7号墳の横穴式石室は、南関東の横穴式石室の中でも最も古い段階に位置づけられ、県内で最初に導入された横穴式石室と言えよう。周溝からは、丁寧に埋葬されたと見られる2.5歳と若い馬の骨が出土している。同一古墳群である三ノ宮・下谷戸3号墳は7世紀前半から中葉と見られる河原石積みの無袖形横穴式石室で、鉄地金銅張雲珠や環状鏡板付轡などの馬具、鉄製鉾先や鉄鏃などの武具、ガラス製丸玉などの装飾品や土師器片、須恵器片が出土している。

三ノ宮・下御領遺跡（天野他1999）からは、周溝のみであるが2基の古墳が発見されている。周溝からは赤彩した高埴4個体分が出土しており、古墳時代後期に位置づけられる。本古墳も、三ノ宮古墳群に属するとみられ、広範囲に古墳群が展開している様相がうかがえる。

三ノ宮地区周辺からは、首長墓と見られる古墳も見つかった。

登尾山古墳（赤星1970）は推定径15～20mの円墳で、埋葬施設は川原石積みの全長約6mの両袖式横穴式石室ある。玄室から羨道部まで半地下式に掘りくぼめて造り、野石乱積みによって玄室を構築している。出土品は、^{けいとう}圭頭大刀など金銀で飾った装飾大刀を含む複数の直刀、金銅装の馬具、銅碗、銅鏡、水晶製切子玉、丸玉、須恵器高坏、土師器坏、埴輪（家形埴輪・人物埴輪など）などが出土しており、6世紀後半から末に位置づけられる。銅碗と銅鏡の両方が揃って出土している事例は、本古墳のみである。

埴面古墳（赤星1979）は直径40mの円墳で、埋葬施設は東側に張り出す片袖式横穴式石室である。石室は、

長さ4.8m、幅2mの玄室と、長さ4mほどの羨道部分から構成されており、野積乱積みによって構築されている。出土品は、銀装の装飾大刀、金銅製の馬具などが出土しており、6世紀末頃に位置づけられる。

近年の調査でも、三ノ宮地区周辺からは、多くの古墳が発見されている。

上粕屋・石倉中遺跡（公益財団法人かながわ考古学財団2016・2023）からは、古墳9基と小石室3基が発見されている。埋葬施設はほとんど残存していないが、2基の古墳の埋葬施設があったと見られる場所からは後世に転用された大量の石材が見つかっており、横穴式石室が構築されていたと想定される。副葬品と見られる鉄製品や須恵器片、瑠璃製勾玉・管玉・琥珀製棗玉・水晶の玉などの装飾品が出土している。

上粕屋・子易遺跡（公益財団法人かながわ考古学財団2018・2019）からは、古墳6基と小石室1基が発見されている（第7図）。3号墳からは、畿内系土師器が出土している。4号墳の埋葬施設は、玄室入口部分に玄室側が低くなる段差が設けられており、富士市一帯など駿東に多い、段構造の横穴式石室に類似した形状である。

子易・中川原遺跡（野坂2020）からは、2基の古墳が発見されている。

子易・中川原遺跡2号墳は円墳で、周溝を含めた古墳の規模は20m、周溝幅は2.5mを測る。墳丘には2段の石列が見られ、葺石と考えられる。石室は無袖式横穴式石室で、石室全長約5m、幅1mを測る。床面からは人骨と須恵器片、金属製品が出土している。コの字形を呈する前庭部からは土師器坏と金属製品、周溝底からは7世紀前半頃の須恵器広口壺が出土している。

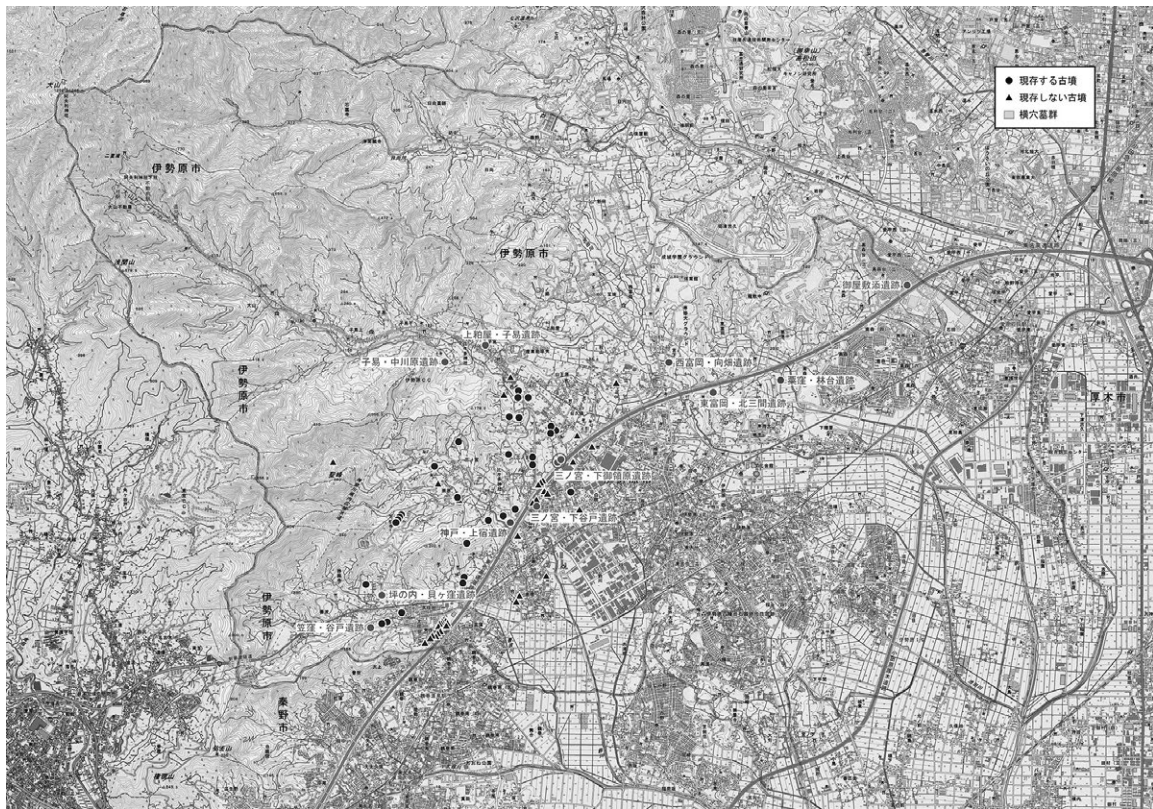
子易・中川原遺跡1号墳の墳形は、墳丘裾部で方形石積が検出されているので、一辺15m程度の方墳となる可能性が高いと言える。方形石積の内側には、石室を囲むように楕円形の墳丘内石列が二重に廻っている様相が認められる。石室を囲うように2重の石列が発見されている事例は、神奈川県では初見である。墳丘内石列の外側部分の方が低い位置に基底石を設置しており、盛土して方形石積を構築している。石室は無袖式横穴式石室で、奥壁には大きな石が2段積まれていることが確認されている。側壁は小口積みで、玄室長約4.5m、幅約1.1mを測る。床面には少し大ぶりの礫が敷き詰められており、床面直上からは人骨と耳環、刀子、鉄鏃が出土している。周溝からは7世紀後半から末頃の須恵器長頸壺が出土している。

3. まとめ

伊勢原市内の古墳の動向を見ると、古墳時代前期では弥生時代からの伝統的な墓制である方形周溝墓を構築しており、前代の伝統をそのまま継承していることが分かる。古墳時代中期にかけては、小円墳が連綿と築造されており、小規模化する傾向が見受けられる。その一方で、前期の集落からは連続しない中期の集落とともに方墳が構築されており、古墳時代中期から外来的様相が認められる。古墳時代後期になると、爆発的に古墳が増加している。特に三ノ宮地域に集中する傾向が認められる。それとともに、新しい技術・文化が導入される。第一に横穴式石室の導入が挙げられる。最も早く横穴式石室が導入されたのが三ノ宮・下谷戸7号墳であり、古墳の周溝には馬が埋葬されて発見されている。古墳の周溝内に馬が埋葬される事例は、長野県伊那谷周辺などに多く認められているが、県内では唯一の事例と言える。また、子易・中川原遺跡1号墳の二重に廻る円形石積や方墳もまた、県内で唯一の事例と言える。県内で出土例の少ない馬具や銅鏡などが副葬される古墳や横穴墓が集中するなど、本地域が古墳時代において、県内の文化の最先端地域であったと考えられる。

（新 山）

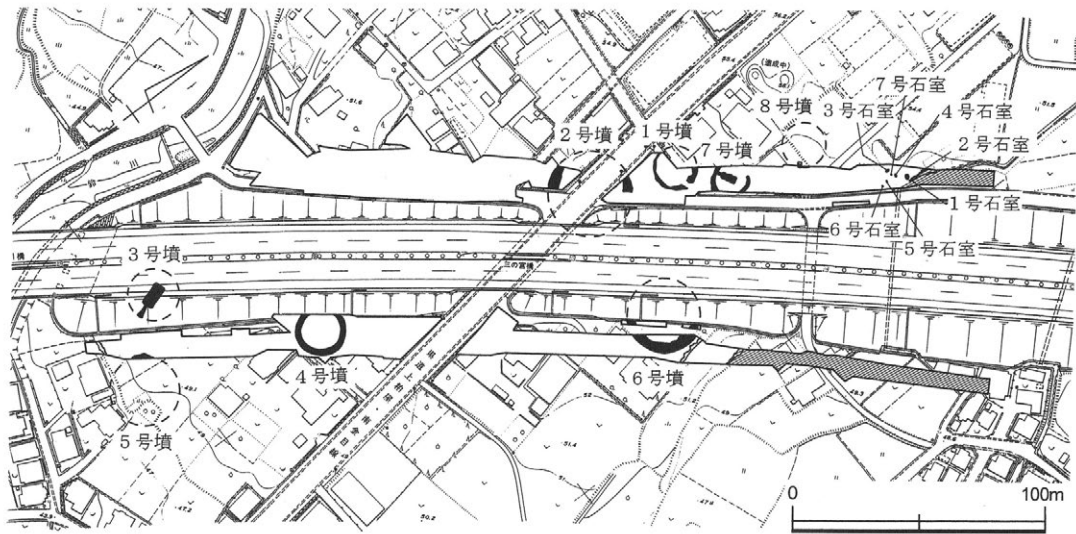
厚木・伊勢原・秦野の古墳調査（1）



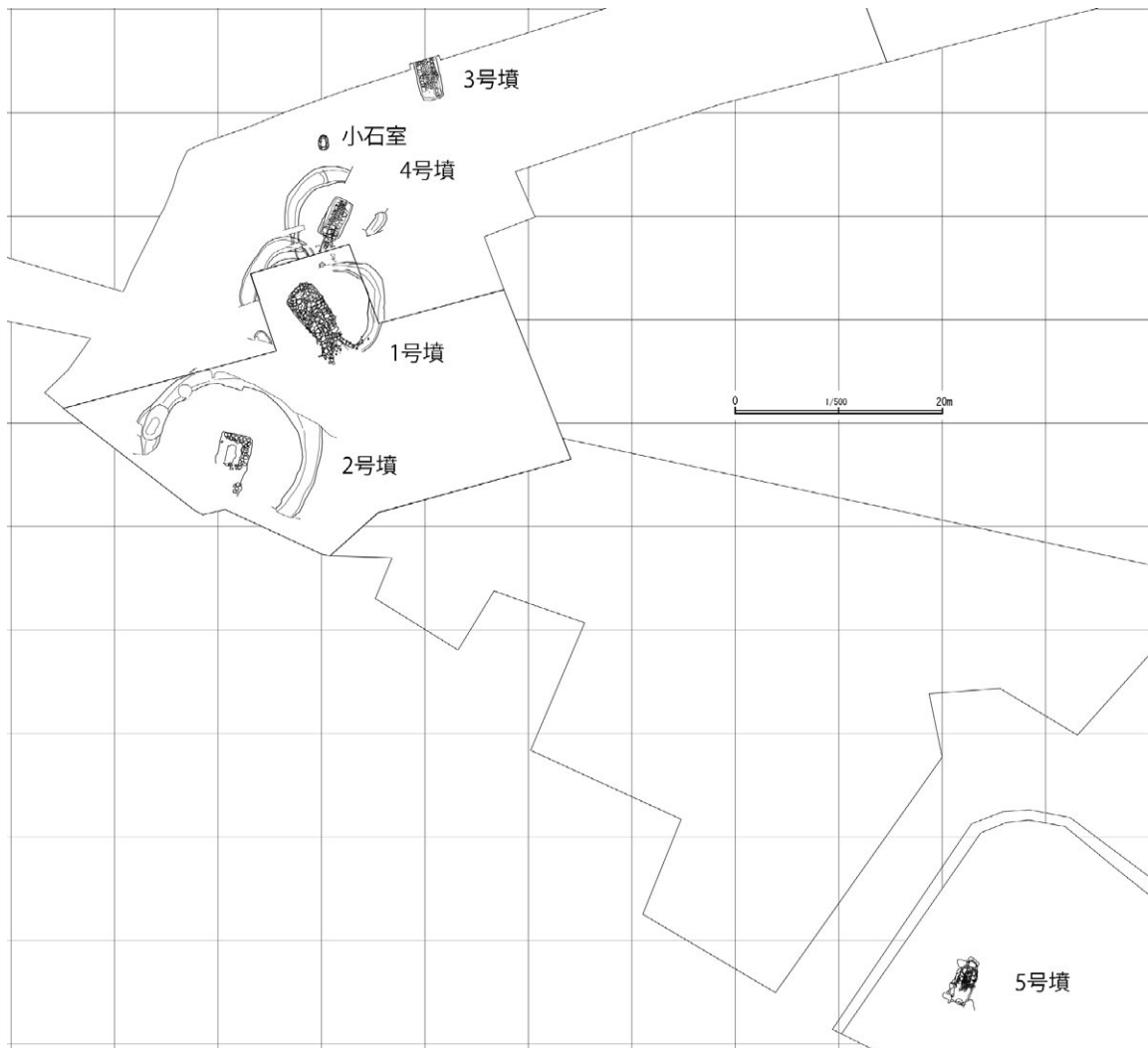
第4図 伊勢原市内古墳分布図



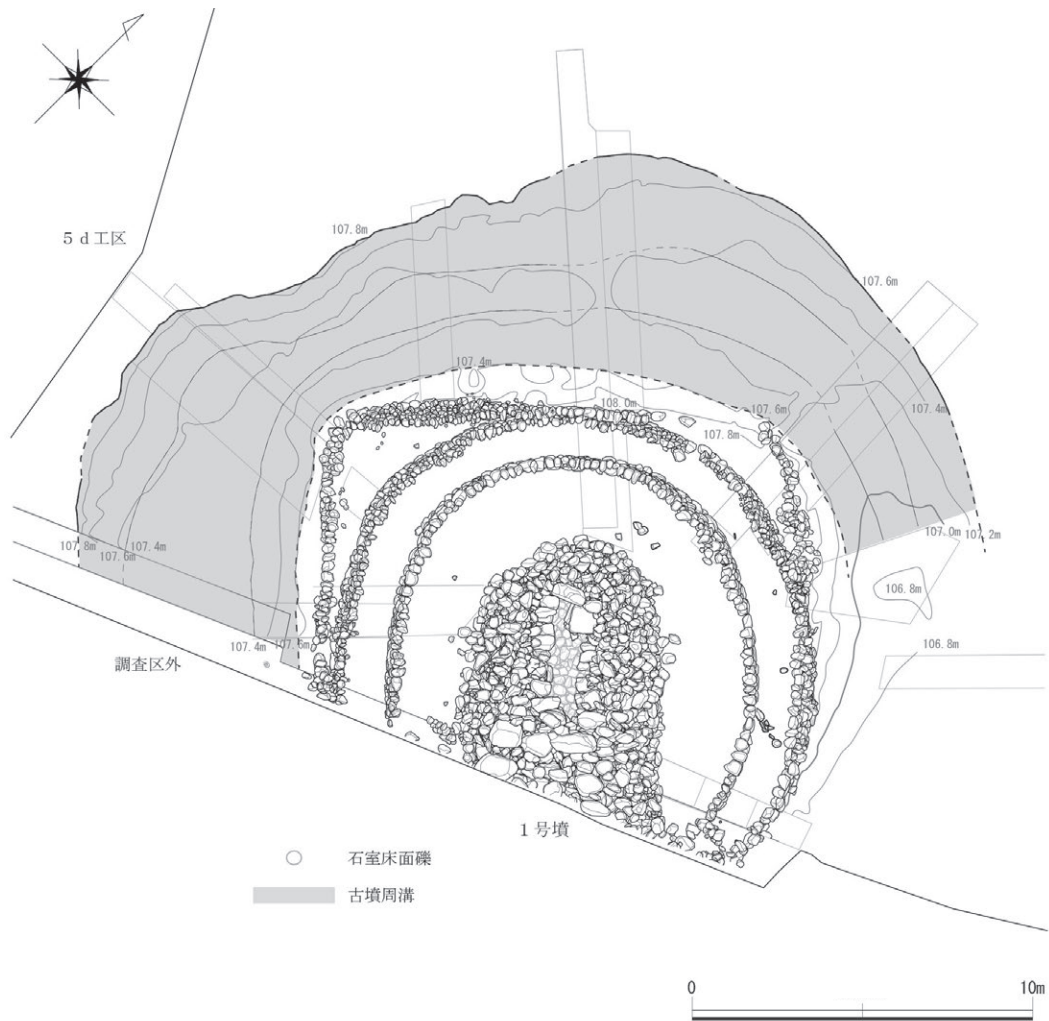
第5図 伊勢原市内主要古墳分布図



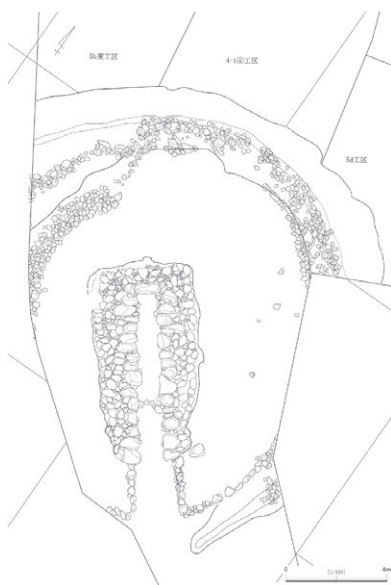
第6図 三ノ宮・下谷戸遺跡古墳分布図



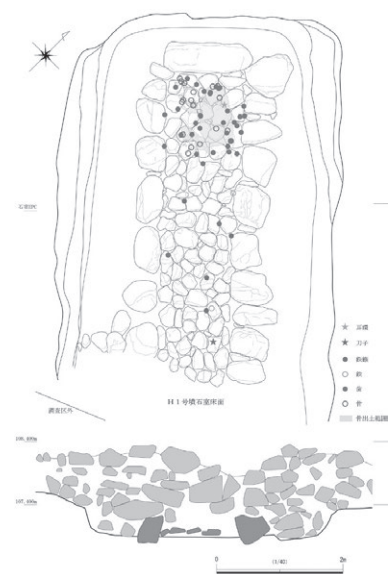
第7図 上粕屋・子易遺跡古墳分布図



第8図 子易・中川原遺跡1号墳墳丘図



第9図 子易・中川原遺跡2号墳墳丘図



第10図 子易・中川原遺跡1号墳石室図

〔引用・参考文献〕

- 赤星直忠 1970「伊勢原町登尾山古墳」『埋蔵文化財発掘調査報告』1 神奈川県教育委員会
- 赤星直忠 1979「恵泉女子短大構内古墳」『神奈川県史』資料編20考古資料 神奈川県
- 厚木市教育委員会・文化財協会 1996『厚木の古墳 厚木市文化財調査報告書』第38集
- 天野賢一・西川修一・堀田孝博 1999『上粕屋・小山遺跡（NO.9・39）三ノ宮・下御領原遺跡（NO.12西）上粕屋・鵜引遺跡』東遺跡（NO.40）『上粕屋・鵜引南遺跡（NO.41）』かながわ考古学財団調査報告52
- 飯田 孝 1993「上ノ原古墳群」『厚木市史 古代資料編（1）』厚木市
- 飯田 孝 1993「桜樹古墳」『厚木市史 古代資料編（1）』厚木市
- 植山英史他 2007『中依知遺跡群』かながわ考古学財団調査報告205
- 植山英史 2010「相模における無袖式石室」『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
- 植山英史 2020「相模地域における横穴式石室の受容と展開」『横穴式石室の研究』同成社
- 木村吉行・柏木善治 1999『坪ノ内・貝ヶ久保遺跡（NO.19・20・43）、笠窪・谷戸遺跡（NO.20・42）』かながわ考古学財団調査報告67
- 熊坂英世 1993「上原1号墳」『厚木市史 古代資料編（1）』
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2016『年報』22 平成26年度
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2018(1) 平成30年度考古学特別講座『大山が紡ぐ歴史遺産～東名から新東名～』
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2018(2)『年報』24 平成28年度
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2019『年報』25 平成29年度
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2021『中依知遺跡群（第3次調査）』令和3年度現地見学会資料
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2023『年報』29 令和3年度
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2022『中依知遺跡群（第3次調査）』令和4年度現地見学会資料
- 戸戸信悟・宮坂淳一 1998『東富岡・杉戸遺跡（NO.38）東富岡・北美間遺跡（NO.4）上粕屋・川上遺跡（NO.5・6）上粕屋・三本松遺跡（NO.7）上粕屋・川上西遺跡（NO.8）』かながわ考古学財団調査報告34
- 戸戸信悟・三瓶裕司・松田光太郎 2000『三ノ宮・下谷戸遺跡（NO.14）Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告76
- 戸戸信悟・宮坂淳一・三瓶裕司・松田光太郎 2000『坪ノ内・宮ノ前遺跡（NO.16・17）』かながわ考古学財団調査報告77
- 田尾誠敏 2001「相武国の様相(2)」『相模国の古墳-相模川流域の古墳時代』夏期特別展 平塚市博物館
- 立花 実 1995「三ノ宮・下尾崎遺跡 三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書」『伊勢原市文化財調査報告書』第17集 伊勢原市教育委員会
- 東海大学文学部考古学研究室 1996「伊勢原市松山古墳の調査」『東海史学』第31号 東海大学史学会
- 西川修一・天野賢一 1998『御屋敷添遺跡第3地点（NO.1）4地点（NO.2）5地点（NO.44）高森・一ノ崎遺跡（NO.37）高森・窪谷遺跡（NO.3）』かながわ考古学財団調査報告33
- 野坂知広 2020『令和元年度子易・中川原遺跡 子易・大坪遺跡調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
- 畠中俊明・田村良照 2014『中依知遺跡群（第2次調査）』かながわ考古学財団調査報告297

図版出典等

- 第1図 古墳時代プロジェクト作成
- 第2図 『中依知遺跡群（第3次調査）』令和4年度現地見学会資料・『中依知遺跡群』かながわ考古学財団調査報告205 位置図を合成・一部加筆
- 第3図 「上ノ原古墳群」『厚木市史 古代資料編（1）』・『中依知遺跡群』かながわ考古学財団調査報告205
- 第4・5図 新山作成
- 第6図 「上ノ原古墳群」『厚木市史 古代資料編（1）』
- 第7図 平成30年度考古学特別講座『大山が紡ぐ歴史遺産～東名から新東名～』
- 第8～10図 『令和元年度子易・中川原遺跡 子易・大坪遺跡調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団